

リーズ大学の経験から

〈イギリス〉

姉崎 洋一

私のみた 海外の大学事情

ゆとりのなさと 視野の貧しさを自覚

これまで私は、長短合わせて都合三回の渡英をしました。第一回は一九八四年夏の一週間の社会教育関係の人々とのス

タディツアー。第二回目は、一九八七年から一九八八年の一年間目客員研究員としての滞在。第三回目は、一九九一年夏の二カ月間の調査研究旅行です（同行したのは、名古屋短大の左口さん、広島大の田村さん）。場所は、主として英国（観光、スタディツアーその他で、フランス、オーストリアに向いている）。滞在目的は、やはり研究というべきでしょう。

ここでは、まず二度目の旅を終えて帰国した時の小文を紹介しましょう。

極東（ファジーイスト）からの客員研究員

「斜陽」と「博物館」の国とか、近年の英国を見る日本人の脳裏には、よほど「落日」や「黄昏」（たそがれ）のイメージが強いようです。「英国病」という命名者の「功」（罪？）、大なりというべきでしょうか。

『ニューズウィーク』の「英国北部の

衰退」という先の印象を追い立て強いような記事を背にして、北部イングリッシュの中心都市の一つ、リーズに到着したのは一九八七年九月二〇日のことでした。一年間の学外研究の主要な目的は、英国成人（労働者）教育の現状と青年教育の現実を実態に即してリアルに把握することになりました。一九八四年の夏に、短期間の駆け足の旅ながら、英国各地の大学、成人教育施設を訪ねる機会がありましたので、英国へは二度目のしかし、今回は、少し定点観測的なねらいをもった滞在です。

到着日が、日曜の午後でしたので、英国的生活様式を考慮して、駅まで迎えに出してくれた、受け入れ学科の秘書のリンダが、滞在先のフラットの部屋に当座の食料品をストックしてくれていました。

私の身分は、リーズ大学成人継続教育学科の客員研究員。学科での研究・生活の配慮、評議会での正式裁可の手續を取って頂いたヘッド（主任）のマリオット

教授(当時)によれば、戦後創設(一九四九年)のこの学科への初めての日本人研究者であることを、後日知りました。

翌日から、大学の研究室におもむいての早速の研究開始。意気込んでいますと、英国の大学は、一〇月以降(人文、社会学科系はとくに)が学期開講。とくに、当成人継続教育学科は、学部学生を持たず、大学院生への研究・教育と成人教育センターとしての一般市民及び諸団体への教育サービス・調査・訓練も主たる任務としていますので、「張りきりすぎず、気楽にどうぞ」とスタッフが声をかけてくれます。

当時、隣室のウイリアムスン氏が、部屋に入ってきて「日本人のY氏を知っていますか」と尋ねます。私も研究会その他でお会いする機会がある、日本福祉大学のY先生のことです。Y氏が、ブリテイツシユカウンシルの留学生として英国内務省の少年司法研究で机を並べた仲とのこと。お互いに、「何とこの世は狭い

のか」と驚き合いました。

このように、比較的スムーズに、生活が開始出来たことは、季節が急速に秋から冬に向う英国北部のグルーミーな天候を思えば、かなり幸先が良かったと言っべきなのでしょう。

私の研究生活のリズムは、日本にいた時以上に規則的になり、前半の一〇月からイースターホリデーまでは主として大学院での講義の受講やセミナーの討議などの系統的な学習にあてられ(途中、報告の機会もありましたが)、英国での研究の潮流、研究者の問題関心のありようを具体的にとらえられたことは、一つの成果といえます。

週末に、我がポンコツ車(VWゴルフ)を走らせますと、ヨークシャームーア(荒野)が、眼前に広がりを見せ、

ヨーク、ハロゲート、ハワース、スカールボラ等の歴史的景観と景勝の地に容易に近づけます。又、ここは北部工業地帯。マンチェスター、シェフィールド、リバプールの歴史的風情に思う事多です。



■リーズ大学キャンパス

後半は、成人及び青年教育施設の訪問、あるいは、主たる研究者へのインタビュアーの旅が始まり、又諸集会、学会、国際会議への参加が重要な仕事となりました。一九八七年から八八年は、英国は激動の年。福祉、医療、教育、労働の分野にサッチャー政権の民営化の「なた」（施策）がふりおろされます。「教育法案」（バーカービル）は、その一つの焦点でした。

日本の「臨教審」改革と対比しながら、当地の人々との出会いと討議は、かけがえない友人をつくり出しました。

「同じトラック線上」（We are on the same track）に在るとの共感、研究を大いに励ますものでした。資料収集や図書館に閉じ込め（時に必要ですが）研究のスタイルとは違う、アクション・リサーチの重要性をつくづく感じ、又日本の情報化、国際化の水準の皮相性には思っていたことはしばしばでした。

必ずや、再び三たび英国を訪れること、

あるいは日本での再会を約する友人研究者たちとの別れは、一方に日本での研究への責任をひしと感じさせるものでした。

『英国病』などと言いたる日本には、『日本病』とも言うべき、閉鎖的かつふところの浅い忙しさが待ち受けているのですから。この点で、経済誌ロンドン『エコノミスト』誌が、『Feeling Poor in Japan』の見出しを付けて特集を組んでいたのはまことに適切というべきでしょうか。（『愛知県立大学学報』第二六号、一九八九、六から）

英国の大学、 英国の心ある人々

英国の大学

英国（この場合イングランド）の大学はその起源において四種別にわけられます。第一群は、Oxford、Cambridgeのいわゆるオックスブリッジとロンドン大学がいわゆる伝統的権威、老舗に相当し、第二に、このリーズやシェフイー

ルド、マンチェスター、ノッティンガム等々の都市大学（Civic University）が今世紀初頭から第一次大戦前後にかけて設立され、さらに第三に、戦後の主として一九五〇～六〇年代に設立されたNew University（サセックス、ヨークなど）。これらは、ヨーク大学を除けば、学部（ファカルティ）の集合体からなっています。そして、第四には、Open Universityや地方自治体設立のポリテクニク等の高等教育機関の一九七〇年代からの急成長が、あげられます。この内、都市大学のそれぞれの設立過程は実に興味深いものがあります。

改革の嵐と英国大学

英国の高等教育（中等教育に続くものとしての第三の教育＝ターシャリー教育ともいう）は、今大変な激動の過程にあります。

第一は、サッチャー政権からの教育改革の嵐が大学にも及んでいることです。

とりわけ、一九八八年教育法の影響は大きく、現在のメージャー政権の下でもサッチャー主義は明確に引き継がれています。九一年夏の三たび目の訪英でも、教育科学省の提案している三つのホワイトペーパー（白書）①Education and Training for the 21st century, Cm 1536,1991②Access and Opportunity: a Strategy for Education and Training, Cm 1530③Higher Education : a new framework,1991.が大きな議論を巻き起こしていました。

これを誤解を恐れずに言えば、「白書」（ホワイトペーパー）は、次の三点が特徴的といえました。

第一には、産業・経済界からの要請に応える教育・訓練改革への志向（資格・高等教育概念の拡大、etc）が鮮明なことでした。第二は、アカデミックなるものの矮小化が意図され、各大学や個人の自由な研究・教育を財源的に統制しようとする（UFCあるいはCouncil）中

央統制の意図が極めて露骨なことでした。第三には、大学・カレッジにおける競争と企業経営手法の導入が推奨され、外部的財源と発言の大学内部への導入が、これ又臆せず述べられていることでした。

このことは、一九八〇年代から九〇年代にかけての高等教育政策と見事に符号しているといえます。それらは、大まかにいえば、次の四点でした。一つには、民営化（フライバタイゼーション）を軸とした財政面からの改革、二つには教育研究上の評価、効率性の面からの大学間、学部・学科間の順位づけと予算配分、三つ目は高等教育人口の量的拡大と多様化の面からの再編、四つ目は、個々人の研究教育への能力主義、競争主義の促進。

これらは、いずれも、アメリカや日本、ドイツの高等教育モデルを意識して上から強引に進めようとしていたことに特徴があります。

大学人の良心と知的・実践的誠実性、
国際的視野

このように、大学の変動の渦中にありながら、これまで私が接し率直に意見を交換してきた大学人たちには、知的誠実性と人間の楽天性の両面を備えた人々が多いことも、私のこの間の印象です。英国の大学の象牙の搭意識を抜け出せない大学人が少なくない中で、これは一つの驚きです。成人継続教育とか労働者教育に関して大学成人教育の立場から一般の人々に、日頃接しているからなのかも知れません。

九一年夏、オックスフォード、ラスキンカレッジでの国際会議（Research as Engagement : An International Conference on Developing Relationships Between Trade Unions and Research Organisations July 1991）を主催した友人キース・フォレストもその一人。日頃から、労働組合の活動家の Workers Researcher 養成に意を注ぎ、同時に国

際的なオールタナティブ・ネットワークづくりにも精力を傾け、論文書きも多産で同時に家族と一夏南仏の共同別荘で過ごすことも忘れない研究者です。リチャード・テイラーは、英国の平和運動の歴史的研究でPhDを取り、成人教育センターのブラッドフォード・プランチ所長の経験もあり、専門職教育、地域教育にも造詣深く大学成人教育のリベラトリーに思慮深くこだわる、リーズ大学成人継続教育学科、構外教育部門の若き主任教授です。家庭を訪問した時の、家族会話も暖かい愛情が満ちていました。紙幅上、他の人物のプロフィール紹介ができませんが、他にケビン・ウォード、ブルース・スペンサー、エド・エリス、等々名を挙げてその研究スタイル、生活を紹介したい友人が私の貧しい体験からも幾人もあげられます。又、英国内にとどまらず国際的にも著名な研究者たちも、その謙虚な人柄と知的誠実さに心打たれました。八七／八八年滞在時、都合三度お会い

し一度は時間を取って頂いたブライアン・サイモン（教育学、教育史）先生は、激しい雨の中、駅まで迎えに来て下さり、私のような者にも気さくに話して下さい、その折り彼の処女作 A STUDENT'S VIEW OF THE UNIVERSITIES, 1943 を古本屋で見つけたのを私が示すと実になつかしそうにサインをして、レスター大学のコモンスルームで戦後の体験を話して下さいことや、掘尾輝久氏の『Educational Thought and Ideology in Modern Japan, 1988』を深く読んでいるところだと話されていたのが印象的でした。

同様な意味でウォーリック大学名誉教授のロイドン・ハリソン（労働政治史）先生も、この夏（九一年）ノーザンカレッジ（バーンズリー、南ヨークシャー）での私達の訪問にわざわざ来て下さり、小講義をして下さったのに、感銘したものでした。他に、ポブ・フライヤー（ノーザン・カレッジ）やビル・コンボイ（二

ユーバートルアベイカレッジ）、ポブ・ホルトン（協同組合カレッジ）、ステイブ・イエオとビル・ヒューズ（ラスキン・カレッジ）ら、レジデンシャル・カレッジの学長らと直接会い、意見交換できたことは三度目の旅の何よりの収穫でした。

九一年夏の旅は、そうした意味で、ロンドン小遊、国際会議への参加、リーズ大学再訪、四つのレジデンシャル・カレッジ訪問、ニューラナーク再訪、ジョン・ラスキンのプラントウッドハウス訪問をはじめとするレーク・デストリクト小遊など、記すべきものが多い旅でした。また、私にとつては、三年ぶりの友人達との再会は、新たな意欲を喚起するものといえました。

（愛知県立大学）